

配慮を必要とする子どもや家庭への支援に向けて
～子どもと共に育つ人的環境～

市原支会 馬立保育所 渡邊 加菜江 高滝保育所 篠原 恵美

保育所の概要

(A 保育所)	定員 40 名	現員 23 名	職員総数 9 名	設立年月日	昭和 38 年 6 月 1 日
(B 保育所)	定員 50 名	現員 22 名	職員総数 9 名	設立年月日	昭和 41 年 4 月 1 日

設置市区町村概要

人口	279,093 人	保育所数	17 か所 (公)	9 か所 (私)
----	-----------	------	-----------	----------

1. はじめに (設定理由)

市原市は、千葉県のほぼ中央に位置し、海側の臨海工業地域と南部の養老川に沿って田園や山に囲まれた自然豊かな地域と広範囲である。この研究に取り組んだ南総・加茂地区は、市の南部に位置し、中規模 2 園、小規模 4 園の公立保育所がある。中規模保育所は市街地にあり待機児童がいるが、小規模保育所は山間であり定員割れをしている。

保育所の現状や市内全体の状況を見ると「周りの子と同じことができない」「落ち着きがない」など「気になる子」が多い。また、「子どもへの関心が薄い」「子どもの気になる姿に目を向けられない」など家庭への支援が必要な保護者もいる。日々保育する中で、気になる子への関わりや保護者への伝え方が難しいと感じることがある。そこで、子ども同士の関わりを追っていく中で保育者同士が話し合い、共通理解を深め、家庭とともに子どもの成長を見守っていきたいという思いからこのテーマを設定した。

2. 仮説

- ① 職員間で話し合いをする時間を設け、意見を出し合うことで、色々な見方を知り、子どもへの理解が深まるのではないかと。
- ② 保護者の気持ちに寄り添い、思いを受け止めることで、気軽に相談できるようになれば、よりよい親子関係に繋がるのではないかと。
- ③ 保護者対応では職員で情報の共有や共通理解をし、保護者に合わせた対応のあり方を話し合うことで全職員が同じ対応が出来るようになり、保護者に安心感と信頼感を与えられるのではないかと。

3. 研究方法

- ① 気になる子どもの様子、他児との関わり、支援方法、保護者との関わり、考察・反省の記録をとり、課題を見つける。(各保育所内での話し合い)
- ② 各保育所で話し合った事例について、検討する。(6園での話し合い)
- ③ 様々な支援方法を基に、職員間で話し合い、共通理解を持って関わられるようにする。
- ④ 保護者の気持ちを受け止め、子どもの様子を伝え合い悩みや喜びを共有して保護者支援につなげていく。

4. 研究内容

《A保育所 5歳児 S君》 「自分の想いを言葉で伝えるのが苦手」 *事例2より

【やりとり・様子】

クラス全員でリレーをすることになった。保育士が人数を見ながら赤チームと白チームに分ける。赤チームになったS君だが、「僕は白がいいから。」の一点張りで赤チームになることを嫌がっている。理由を尋ねても自分の思いを上手く言葉で表せない。保育士がクラスの子どもたちに「どうしたらいいと思う？」と聞いてみた所、Nちゃんから「私が代わってあげるよ。」という声上がる。S君は自分の思いが通り、満足した様子でリレーに参加した。S君の思いが通って白チームになれたことは、本児にとって良かったのか？疑問が残る。

【園内での話し合い及び考察】

- ・保育士が一方向的にチームを決めてしまったことが反省点。子どもの意見を取り入れ、主体性を大切にしながら決められると良かった。
- ・解決の方法をいくつかあげて選択できるようにしてはどうか？自分で選んで納得し、できたことで自信に繋げていく。選択肢を広げていけるようにする。(例)①リレーをやらない。②赤チームでやってみる。
- ・クラス全体にS君を思いやる姿が見られて嬉しい反面、自分の思いが通ったS君は果たして本当の解決になったのだろうか？日頃からこだわりの強さを見せる本児に対して、自分の思い通りにならないこともあるという経験も必要なのではないかと感じる。

【6園の話し合い】

- ・本児のその時の気分も関係しているのではないかと。もう少し本児の気持ちに寄り添った言葉掛けができると良かった。
- ・子どもが自分で選択して決められる場面を作っていくようにする。
- ・現在は小さい頃から同じクラスで過ごしてきた仲間の理解があるため、S君の思いが通りやすい環境にあるが、就学後はそのようにはいかないことが予想され、年長児として多少の我慢はできた方が良かったのではないかと。今後どのように経験できるようにしていくかが課題である。
- ・S君は言葉のやり取りが苦手な面があるため、保育士が代弁して伝えていくことは必要。自分の言葉で表現できるよう援助していく。

【考察・まとめ】

保育をしている中で、子どものこだわりの強さをどこまで受け入れて良いのかその判断に迷うことがある。年長児のため、時には我慢することも大事だと考える。自分の意見を主張することも大切だが、周りに合わせることの大切さにも気付けるようにしていきたい。また、自分で選んで行ったことが成功した時に、より一層自信につながるように思う。その為には子どもの主体性を考えて保育し、子どもが自ら選択できる場を増やしていくことが必要である。その後の類似した場面の中で、自分でチームを選択できるようにした所、頑なに特定の色に固執することはなくなった。人数調整の際には「一人足りないからチームを動いて欲しいな。」とお願いすると「いいよ。」と快く応じるようになり、以前よりもこだわりが少なくなってきた。

《B保育所 4歳児 J君》「親との関係作り」 ※事例3より

【やりとり・様子】

運動会の練習が終わり入室して汗をかいたので着替えようとしていると、J君が「もういやだ！」といらいらしている様子なので保育士が「どうしたの？」と声をかけると、J君が「靴下が分厚いのしかない。」と生地が分厚い靴下しか引き出しにないことを怒っていた。保育士が夕方迎えに来た時に母親に靴下のことを伝えることを話すと落ち着いた。

夕方、母親が迎えに来た時に靴下の件を話すと、母親は薄い靴下がいいことをJ君から聞いていて知っていたが、保育士が様子を伝えてもあまり気にしていない様子だった。J君の思いを伝えたいつもりだったが、伝え方がいけなかったのかもしれない。

【園内での話し合い及び考察】

- ・本当に靴下が分厚いのが嫌だったのか、ただ何か訴えることで構ってほしかったのか、母親に自分の思いを受け止めてもらえない寂しさからきているのかもしれない。
- ・母親は会話していても何か支度をしながら聞くということが多く、こちらの話をしっかり聞いていないので聞いてもらえるような雰囲気、時間が必要なかもしれない。
- ・母親は、J君の気持ちよりも自分の都合で考えることが多いように感じられる。

【6園の話し合い】

- ・本当に訴えたいことは靴下のことだけでなく、普段から母親が話を聞いてくれないという不満もあるのではないかと思われる。
- ・母親に話をする時にいきなり靴下のことを聞くのではなく、運動会のことなどJ君が頑張っていたことなどから伝えると母親も聞いてくれたのではないかと思う。
- ・母親にしたら「たかが靴下で」という気持ちなのではないかを感じる。
- ・こちらが結論を出すのではなく、母親にJ君がいらした原因を考えてみるように働きかけるのも一つの方法ではないか。

【考察・まとめ】

背景には、J君からすると、「どうせお母さんは僕の気持ちをわかってくれない。」という気持ちもあるのではないかと考えられる。J君の本当の気持ちに対してどう保護者に伝えていけばいいのかはJ君の気持ち、言葉を何度も聞き出すことでJ君と保護者との橋渡しに保育士がなれると良い。また、なかなか話が伝わらないようなら日々の子どもの様子を伝えていく中で関係づくりをしていくことが必要ではないかと考えられる。保育士体験など母親が自分のために時間を作ってくれるということを知るだけでも安心感につながるのではないかと感じる。

5. まとめ

【事例検討】

事例検討として保育の一場面を切り取ったことで自分の保育を振り返るきっかけができ、その時に現場で汲み取ることの出来なかった思いや、違う見方に気づくことができた。更に、講師の助言を頂いたり、所内の職員をはじめ、話し合いをした6園の保育士と意見交換をしたりすることで、より多くの意見を取り入れ、保育に生かすことができた。また、1年を通して各園で対象児の姿を追っていくことで、子どもの育ちが見え、成長を感じた。

【職員間の共通理解】

この研究を通し、話し合いの機会を多くもつことができた。そのことで、担任が背負い込みやすい悩みを他の職員と共有していくきっかけとなり、保育所全体で配慮を必要とする子どもを見守り、気に掛けていく体制ができた。話し合いを重ねていく中で、事例で挙げた子どもだけでなく、他の子どもについても話を膨らませ、子どもへの理解につながり、職員で共通した言葉がけや対応をしていくことができた。

【保護者支援】

保護者の気持ちに寄り添い思いを受け止めるよう職員全体で関わった。職員が同じ姿勢で保護者に関わることで保護者が安心して相談されることが増え、子どもの様子を伝えやすくなった。その一方で、あまり保育所に来ることのない保護者には、子どもの困っている気持ちや保育者の思いを伝える難しさを感じる。

6. 今後の課題

今年度のみではなく、引き続き職員間で話し合い共通理解し合える環境づくりに努めていく必要性を感じた。その為には、気軽に話しやすい雰囲気となるよう日々の意思疎通を大切にしていきたい。職員間の良好な関係は、子どもが安心して過ごす為の良い人的環境となるだろう。更に、子どもが安心して保育所生活を送る姿こそ、保護者との信頼関係を築く第一歩であると考えられる。保護者と保育所との信頼関係を重ね、保護者の思いを十分に汲み取り、共に協力し合える関係づくりを行う。また、子どもの育ちを支える為、保育所だけでなく他の機関ともより連携を密にし、専門的な意見を取り入れていく。特に、就学後も子どもや保護者が安心して過ごしていけるよう、これまでの成長過程や支援方法を小学校へ伝え、連携を取っていく必要がある。